

私の意見

my opinion

「孫やひ孫が生きる時代の環境を考えよう」



安成哲三

名 古屋 大学
地球水循環研究センター
教授

現在、「地球温暖化」の議論が盛んです。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）では、21世紀末には、人間活動による温室効果ガスの増加により、地球全体で2〜3℃の気温上昇を予測しています。

予測モデルの不完全などを理由に、このような予測に根拠はないと主張している人たちもいます。しかし、たとえば空気中の二酸化炭素濃度の増加は、約百万年前から19世紀末までのあいだ、180〜280ppm程度であったのが、現在はすでに380ppm、21世紀末には、いくら抑えても600ppm、何もしなければ1000ppmに達してしまふことが予想されています。人間活動が地球の気候を大きく変えつつある可能性は否定できません。

気温が上がることも問題ですが、もっと重要なことは、農業や水資源にとって重要な雨や雪の変化、すなわち水循環が温暖化とともにどう変わるかという問題です。

最近、豪雨の頻度が増える一方、渇水の頻度も増えていきます。名古屋の水源として大切な木曾川、飛騨川の水の多くは、冬の積雪で支えられています。その雪も減ってきています。冬が暖冬傾向になっており、過ごしやすくなったと思う人もおられるでしょうが、シベリアからの寒気が弱まり、日本海側や中部山岳の積雪が減ることは、私たちが住む中部圏を含む太平洋側の大都市の水資源に大きな影響を与える可能性があります。

その影響が現れるのは、数十年先のこともかもしれません。あるいは、じわじわと現れてくるかもしれません。現在の農業は、そして都市の文明は、そのような大きな気候環境の変化に対し、どの程度準備できているのか、対応できるのか、真剣に考えておく必要があります。

ふだん、私たちは明日の生活のことをまず考えます。しかし、時々私たちが孫やまだ見ぬひ孫たちの生きる時代のこととも考えることも必要ではないでしょうか。

将来やってくる人たちが頼らなければならぬ地球の環境を考える、あるいは「思いやる」ことができるのは、人類の長い歴史の中で培われた人間だけがもつ知ではないかと思っています。

1947年山口県生まれ。京都大学東南アジア研究センター助手、筑波大学講師、助教授、教授を経て02年より現職。筑波大学名誉教授。海洋研究開発機構地球フロンティア研究システムプログラム・ディレクター、世界気候研究計画科学委員会委員なども歴任。現在、名古屋大学グローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」の拠点リーダーも務めている。日経地球環境技術賞など受賞多数。専門は気象学・気候学、地球環境学。